◉論説

大陸に興奮する修学旅行

——山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」——

阿部安成

一　海外修学旅行の始まり
——山口高商をフィールドとする——

五月には第一回満韓修学旅行を実施したが、当時高等専門学校にして外国旅行を行ひしは殆ど他に其例を見ず、この挙は実に劃期的な意義を有する企であつた。(1)

山口高等商業学校（以下ほかの高商もともに山口高商のように略記する）は、その校誌を編むにあたって「教課訓育及施設概要」の章のなかに「満支朝鮮及内地修学旅行」の項を設けた。そこに記された一九〇七年「第一回満韓修学旅行」の実施は、山口高商の歴史にとどまらず高等教育史において、それをもって大きく時間を区切る意義があったと確認されたのだった。本稿では、この山口高商の海外への修学旅行について、その概要とおおまかな意味を示すこととする。

まずは、海外修学旅行にかかわる山口高商の校史をたどろう。山口高商は、一九〇五年に山口高等学校から改称され、その年の五月八日に第一回入学式をおこなった教育機関である。一九〇七年五月八日にあらためて挙行された開校式において、校長松本源太郎は、開学時の文部大臣だった久保田譲が示した四か条の「訓令」を、「本校ノ方針」と受けとめて披露した（YH537–540）。その第一は「高等商業学校トシテ本校ハ徒ラニ深遠ナル空理ニ馳セス、実際ニ重キヲ置クヘシトノコトニシテ、是ハ当時実業界ノ経験ヨリ商業教育ノ方針ヲ、斯ク向ハシムルノ必要ヲ感セラレ

シニ由ルモノナリ」、第二に「成ルヘク少年ノ中ニ高等商業ノ教育ヲ了ヘ、実業ニ就カシムヘシトノコト、是レ亦実業社会ノ経験ニ基クモノナリ」、第三が「本校ノ卒業生ハ成ルヘク満韓地方ニ従事セシムル目的ヲ以テ教育スルコト、是ハ当時ノ趨勢ト本校ノ地理上トニ依リ定メラレタルモノナリ」となる（第四は省略）。

校長が自覚する学校の方針は、「空理」より「実際」、職として就くべき「実業」、そして従事の地としての「満韓地方」であり、これらは「実業界」や「実業社会」の「経験」や時代の「趨勢」、そして山口高商の「地理上」の位置をふまえたうえでの指示なのだと掲げられたのだった。〈実〉なるものの尊重と特化、「満韓」への注目である。この方針は、渡辺融山口県知事によっても支持されていた。開校式祝辞で彼は、山口は「商業繁盛ノ区ニアラス、人口寡少ニシテ四至ノ交通其便ヲ欠」く、と商業教育を展開するうえでの不利があると知ったうえで、「今ヤ帝国新ニ戦勝ノ後ヲ受ケテ、諸般ノ事業ハ大ニ勃興シ満韓ノ経営特ニ多事ヲ極」めるときだからこそ、「此時ニ方リ本校ハ高等商業学校ニ変更セラレテ、今後商界雄飛ノ材ヲ養成セントス」と宣言したのだった。日露戦後の満韓経営を担える人材養成を目指す学校としての運営がおこなわれてゆくなかで、第一回入学生が三年生になった一九〇七年に、山口高商で初めて満韓修学旅行が実施された。

山口高商細則には一九〇八年度に「第十二章　修学旅行」がおかれ、修学旅行は毎年春季に一回おこなうこと、病気など重大な事由がないかぎり修学旅行を欠席できないこと、修学旅行の地域は、第一学年は中国か九州地方、第二学年が阪神か京浜地方、第三学年は「清韓地方」とすること、修学旅行の課題として「視察報告書又ハ紀行文」を提出することとし、その評点は学年試験点にくわえること（一九一四年度に学年評点）、修学旅行費として八月をのぞき毎月二円を納付することとなった[2]。一九一二年度には、第三学年の旅行先が「朝鮮又ハ支那」と変更され、一九一六年度には、後述する支那貿易講習科の生徒も修学旅行で「支那」へでかけるように規定される。一九一七年度には、第三学年の行先が「支那朝鮮又ハ東京地方」となり、そして一九一九年度になると、修学旅行は第三学年のみに課され、旅行先は「支那朝鮮又ハ内地」、提出された視察報告書には「評点ヲ付ス」とされ、旅行費は第二学年までに総額二二円を三分割して積み立て、後述する支那貿易科の生徒には「毎年一回夏季休業中、支那地方ニ修学旅行ヲ課ス」こととなった。

「我が校が標榜せる満韓の地に渡」った第一回修学旅行は、「空前の大旅行」と参加者に享受され、「身親しく其〔満韓＝引用者による。以下同〕の人情風俗を視察し、万般の経済事情を実地踏査研究せし」との結果が、当事者に

よって帰校後に記録されたのだった。[3] 山口高商における海外修学旅行の始まりである。

二　海外旅行という歴史

近代日本の海外旅行や、高等教育機関における海外への修学旅行は、これまで歴史のなかにどのように位置づけられてきたのだろうか。近年の『朝日新聞』投書欄「声」で組まれた「読者がつくる記憶の歴史シリーズ」に、「海外渡航が自由化」という項があった（二〇〇六年三月二二日）。この欄に投書した東京都港区在住の会社役員（女性、六〇歳）は、一九六四年に「海外観光渡航が自由化された」とき、オーストラリアに留学した体験をもつ。「帰国後、外資系航空会社に勤め、自由化を実感した」彼女はいま、およそ四〇年まえの過去を「日本人に海外渡航が浸透していった」転換期として回顧する。こうした体験者の記憶からすれば、そして多くの日本人が共有する朧気な記憶では、日本人のあいだに海外旅行が浸透していった時期は、戦後の、しかも東京オリンピックが開催されたり、東京モノレールや東海道新幹線が開業したりしたそのころと想起されたのである。

こうした現在の記憶には、忘却による歴史の欠損がある。このような事態を「歴史の大きな盲点」とよんだ高媛は、「戦前に、満洲をはじめとする「外地」、植民地へのツーリズムが、組織的に、また盛んに行われていたにもかかわらず」、いまではそれらが忘れられ「盲点」となってしまったと指摘した。ただし彼女は、「この「盲点」に照明を当てて「光点」に反転させるのではなく、「盲点」のままでは見えにくい歴史の陰影に潜められている問題点を浮き彫りにすること」を意図していた。[4] 高自身が「充分に展開できなかったかも知れない」と補記した彼女の試みは、歴史の欠落部分を補綴するにとどめずに、歴史を書くこと自体の工夫を展望していたといえよう。わたしも高媛のひそみにならって、おおまかに、二〇世紀前期に山口高商がおこなった海外への修学旅行をたどり、あわせて、それにふさわしい歴史の書き方を示してみるとしよう。

ここで、山口高商とおなじように二〇世紀初頭を創立の時期とする、ほかの高商の事例を参照しよう。「本校は、東京、神戸両先進校に次ぐ第三高等商業学校」[5] とみずからを位置づける長崎高商（一九〇五年開学）は、創立三十周年を記念して編んだ校誌に、修学旅行を一つの項として立てていない。山口高商が日露戦後の満韓経営を担うと表明していたように、長崎高商もまずは、「本校創立の趣旨は、清・韓方面に活躍すべき人材の造就を主眼とした」と校誌に明記する。それは「日露戦争の前後を通じ、東亜の発展を急務とした事情」により、「先輩校即ち東京及び神

戸（第二）の両高等商業学校が広く対世界的の商業知識を授けたに対し、本校及び山口（第四）の両校は、特に東亜の開発を目指して其教育方針を定めた」のだった。長崎高商の校誌では、「生徒及び卒業者」の章のなかにおかれた「生徒」という節の末尾に、「尚、修学旅行に関しては四十年〔一九〇七〕の夏季休暇を利用し、北清地方及び阪神、東京地方の見学が企てられたが、之を先蹤として、爾来殆ど毎年其実施を見るに至つた」（NH73。第一編「明治時代」）と記されるにとどまっている（第二編にはない）。第三編「昭和時代」では、「尚、修学旅行は例年実施され、最近にては主として満鮮支並に南支視察団の組織を見たが、九年度〔一九三四〕に於る満鮮支視察団員は二十余名の多数に上り、此旅行実施の必要さを明示した」（NH238）と、その活況と意義とが記されている[6]。だが、長崎高商の校誌が修学旅行を詳述することはなかった。

長崎と山口よりものちの一九一一年に第五の高商として開学した小樽高商でも、最初の第三学年の生徒が一九一三年に海外への修学旅行にでかけていた。それは、ウラジオストク、清津、元山、釜山、そして九州から本州をめぐり東京で解散する旅程だった。校誌を上梓しなかった小樽高商に残る草稿では、「学事報告」あるいは「教課訓育及施設概要」のなかに修学旅行についての記述がある。だが、最初の海外修学旅行となる一九一三年、その翌年の旅行について、草稿のどこにも記されていないのである[7]。この第一回海外修学旅行については、『小樽新聞』が「環行三千哩」の題で四五回もの長期にわたる連載記事を掲載していた（一九一三年九月一三日～同年一二月一六日）。地元紙の記述量の多さにくらべると、最初の旅行を記録しなかった小樽高商校誌稿本の編集方針が奇妙にみえる。

候補地として反対意見があるものの大分に学校を設置すれば、「高商の勢力範囲は、福岡、若松、門司、愛媛県等は勿論、遠く支那方面にまで及ぶであらう[8]」と期待され、大分高商は第八の高商として一九二二年に開学した。のちに、「所在地近接の理由により、山口・大分の二高商と多年友校関係を継続し、随て訓育方針に於ても常に同一歩調を採り来つた」（NH167）と長崎高商が記したように、この三校には近さゆえの密接なつながりがあった。創立二十周年を記念した大分高商の校誌には、第二章「学事の変遷」の「生徒」の節に「視察旅行」の項がある。大分高商では、「大正十三年以来、年々生徒の視察旅行を行ひ来りたるが、初めは専ら支那及植民地に限りたるところ、昭和二年より内地商工都市」も対象とした。一九二四年から一九三九年までの毎年（一九四〇年は中止、一九四一年は内地のみ）、複数の班を編成して外地をふくむ視察旅行が実施されていた（OH183-185）。詳細な旅程がわからないものの、「支那」「満洲」や朝鮮、台湾、樺太が渡航先となっ

ていた。こうした情報の概略を一覧として載せるだけで、大分高商のこの校誌では、編年の沿革史が載る第一章「沿革概要」のどこにも修学旅行の記述がないのである。

二〇世紀初頭に開学した長崎高商、山口高商、小樽高商、前二者と緊密な関係をもった大分高商のいずれもが、第一期の卒業生となる第三学年の生徒たちに朝鮮半島や中国大陸をめぐる旅行を課していた。この修学旅行や視察旅行の意義がそれぞれの高商でどのように自覚されていたのかをたどろうと校誌をみても、山口高商をのぞくと、そこにはいわば薄い記述しかなく、学校の運営に不可欠な機能として海外修学旅行が評価されているとはみえないのだ。冒頭でみたように、これら四校のなかでは山口高商だけが、海外修学旅行の「劃期的な意義」を明確に表明していたのだった。山口高商をとりあげる所以である。

三　海外への修学旅行

(一)　機動

一八世紀に創設された明倫館から歴史を書き起こす『山口高等商業学校沿革史』は、総頁数一二〇〇を超える大部の史書となり、その第六篇から第八篇まで三期に分けられた山口高商の各時期に、修学旅行の項目をおいている。校誌の記録によると、山口高商ではその始まりから、修学旅行の渡航先を海外としていたわけではなかった。一九〇七年に予算措置がとられた学生費から支出する実地研究費が生徒修学旅行費の一部補助にあてられ、海外への修学旅行が始まった。「満支朝鮮方面へ修学旅行団を派遣せしは、満韓経営を教育方針の一とせる本校の使命に副はんが為であつたこと言ふ迄も無い」と校誌に記されたように、山口高商では「満支朝鮮」への修学旅行を、山口高商生を実業界に送りだすにあたって欠かせない教科と自覚していたのである(YH602-603)。

第一回のそれは、二名の教官が引率する第三学年生二八名

が、一九〇七年五月二三日から三一日間、釜山、大邱、京城、仁川、大連、旅順、営口、千金寨炭坑、奉天、安東県、平壌、仁川、群山、木浦、釜山をまわった。一九一一年の第五回までは、このときとほぼおなじ旅程が組まれた。一九一二年には、実に八〇余名という多数の生徒を四名の教官が引率して、五月一一日に出発、「初めて支那本土へ向ひ」、上海、杭州、蘇州、南京、漢口、武昌、上海を訪ねる三三日間の旅行となった。この大旅行団ともいうべき一行のようすは、その一齣をキャプション「南京孝陵ニ於ケル修学旅行隊」の写真（G49: 130225）にみることができる。引率教官の専攻や担当講義をみると、海外修学旅行の引率者にはどのような分野であれ、かならずしも渡航先を専門に研究している教官をあてたわけではなかった。

一九一三年には二つの旅程を設けて、一つはほぼ前年同様、もう一つは釜山、大邱、京城、仁川、そして釜山にもどるコースをとった。このとき、朝鮮半島と「支那本土」をめぐる二つの旅程のあいだで、「満洲」がはずされてしまったこととなる。一九一五年には、「日独戦後の山東省を視察せんが為、支那旅行隊の旅程に青島方面を加へた」というように、わざわざいまだ戦地といってよい場所を訪ねることもあった。

こうした修学旅行は「満支及朝鮮旅行に於ても内地旅行に於ても、常に生徒をして商店・工場その他実業界の実地に就いて見学調査せしむると共に、各方面の権威者より屢〻有益なる講話を聞くことゝし、以て実際的教育の効果を挙げることに努力した」とその内実とねらいが校誌において示されている（YH603-604）。校誌に記録された第一回修学旅行での講話数は、三一日間で四〇回を超えるほどにとても多く、そのうち二六は講話者と論題、一五は講話者のみがわかっている（YH605）。「税関に就て」（釜山税関長山岡義五郎）や「満鉄経営の現状及将来の計画」（満鉄調査役岡本芳二郎）を論題から推測できる「実際的教育の効果」をねらった講話とすると、「訓示」（韓国統監伊藤博文）は、山口高商ならではの「権威者」から聞くことができた訓話となろう。

修学旅行先での講話は、学内にも広報されることがあった（G50: 130720, G57: 170714, G60: 190317, G61: 190715）。一九一三年の朝鮮総督府での寺内正毅総督の訓話は、「諸君が修学旅行として朝鮮の地に入り、其の得たる処を以て学習上の参考とせらるゝは、余の大に多とする処なり。〔中略〕幸に諸君は実業的方面に関する学業を修めつゝあり。新領土の観察に着眼せられしは、余の大に満足とする所なり。〔中略〕真面目に学業を修め、卒業の暁には、学校に於て得たる蘊蓄を発揮するに当り、自己を第二として、国家的観念を第一として、終始一貫国家の為に奮闘せ

られんこと、余の希望に堪へざる所なり」と説き聞かせていて、山口高商の教育方針をふまえたとはいえ、紋切り型の内容ではある。

渡航先の各地ではほかの高商の修学旅行とおなじく、山口高商でも名所旧跡や戦跡などを見学していた。朝鮮半島や中国大陸への旅行としては典型の旅程、山口高商らしく旅行に組み込まれた〈実〉をくりかえし表明する校誌の記述、戦跡というにはまだなまなましかった「戦後」情況の視察――これが山口高商の初期の海外修学旅行だった。

校誌では、つぎの第二期（一九一六～一九二五年）の記述に、まずは校長の教育方針が示される。「満韓経営の校是は校制変革以来の伝統であるが、我が国運の隆盛と世界の大勢とに鑑み、更に之を拡張して「東亜の経営」なる大理想に進め、質実剛健なる商士を大陸の経済戦線に供給することを以て、本校教育の一目標」となった（YH768）。経営の範囲が満韓から東亜へと拡張されたこの時期の「修学旅行の変遷」をあらわすとき、校誌はこの第二期の方針を過去に溯ってあてはめてしまい、すなわち、「本校々是たる実際的教育の実現を期せんが為、夙に修学旅行の制度を設け、殊に東亜経営の使命に鑑み、全国諸学校に魁けて、毎年鮮満支方面の旅行を奨励した」（傍点は引用者による。以下同）と書かれたのだった（YH794）。その始まりから修学旅行に「東亜経営の使命」が籠められていたと書いてしまう校誌は、また当然のように、第二期においても「第三学年の鮮満支方面旅行も甚だ盛況を呈した」とみずから誇るのだった。

校誌は「甚だ盛況」と記したそのすぐあと、「然るに」と逆接でつないで第二期の展開を書き始めなくてはならなかった――「一面此の如き大規模なる修学旅行の実施には困難なる事情を伴ひ、弊害さへみらるゝに至つ」たというのだ。時勢がみずからに課したと自認する「東亜経営の使命」を山口高商の校史の始まりにまで遡及させたうえで、その任務の遂行を賞讃する記述と、「修学旅行制度改正」に到る実情を明かすいわば白状とが併記されたのである。ただし、盛況の陰にあるという弊害の具体相が校誌に記されたわけではない。修学旅行の「再検討」が一九一八年九月の教官会議でおこなわれ、前述のとおり、翌年度から第三学年時にのみ実施することとなった修学旅行は、「支那朝鮮又は内地」にゆくことが決定した。さらにまた一九二一年一月に、修学旅行制度改革案を教官会議で審議し、その結果、山口高商の修学旅行制度は、春季か夏季の休業中に「生徒に自由なる旅行をなさしめ」る、と大幅に変更されたのだった。同時に、修学旅行出席者が減らないように、校費による旅費補助を継続し、旅行報告書を公表したり、就職のさいの履歴書に書けるようにしたりするなど、「諸種の奨励手段を講ずべきこと」を決定した。この当時

学内外に示された制度変更の理由は、「団体修学旅行は学生各個の研究に不便少からざるの故」だった。[9]

ただし従来の制度による最後の年となったこの一九二一年の旅行は、「総計六十余名に上り満鮮を最多とし、遠くは南支、仏領印度支那方面に赴く」ものもいた。「今後適当の方法を講じて、米国、印度方面にも旅行範囲を拡大するの計画ありといふ」と同窓会は母校の教科を受けとめたのだった。[10] 他方で、「勿論支那は初めて」で宿賃もわからずに「心の中でびくびく」した生徒にとっては、今回の変更については「何故早く是を発表しなかつたか、学校当局も余りだ。学校と云へば今度の旅行に何程の便宜を計つて呉れたか？、何故に天津、北京等に先生や学生旅行隊の為に特に設けられた駐屯軍に照介して呉れなかつたか？、そしたらどの位経費の節約になつたか知れない。大連に渡つても満鉄の割引券がなくて大迷惑した、幸親切な卒業生から色々と照介して頂いてよかつた様なものゝ」（「天津迄」G65: 210710）と、つのる不満と不信を表明する生徒を登場させてしまった。

(二) 転換

山口高商の第四年度となる一九〇八年から学校細則に記された修学旅行の規定すべてが一九二二年度に削除された。そのうえで、第三学年生徒による「支那若くは鮮満地方旅行の伝統は之を廃絶することなく」、校費による補助を得て個々の「単独旅行」がおこなわれることとなった。しかし、一九二三年度以降は補助の原資となった学生費が削減されてしまい、この単独の「支那若くは鮮満地方旅行」は「漸次不振の傾向を示すことゝなつた」と、校誌は記さざるを得なかった（ただし、一九二四年には団体旅行が一時復活したという）。つまり、この第三学年生徒の修学旅行が「最も盛況を呈したのは、大正九年度迄」となる。校誌のいう「昔日の盛況」とは、一九一六年度から四年のあいだの「中支及鮮満の二隊」による旅行、それにつぐ一九二〇年度の「更に北支及台湾の二方面をも加へ合計四隊を派遣した」そのときまでを指すのである（YH795）。

短い期間ではあれ、山口高商海外修学旅行の盛況を支えたその一つに、学外からの寄附金があった。一九一九年には、阪神地方や東京の企業からの寄附金が総額七〇〇円となり、また支那貿易科の三井物産学資補給生二名に、二〇〇円ずつの旅費補給があった（その後も継続）。さらにこの年と翌一九二〇年には、朝鮮銀行が「時勢の進運に鑑み、鮮満に於ける経済研究の気風を鼓吹する為」、該地域への修学旅行を実施しようとする教授と学生に旅費の補助をおこなった。外部からの寄附により、教官二名に千円ずつ、支那貿易科生徒二名、第三学年生徒二名にそれぞれ二〇〇円があたえられたり、あるいは、外務省対支文化事務

局から山口高商に割りあてられた補助金五〇〇円により、一九二三年には第三学年生徒一名が、釜山、京城、平壌、鉄嶺、撫順、遼陽、営口、大石橋、大連にでかけたりしたのだった（YH797–798）。

ここで、山口高商におかれた本科以外の学科についてみよう。それが一九一六年設置の支那貿易講習科である。「対支商業ニ須要ナル知識ヲ習得セシムル」ための修業年限は一年、「支那語」を履修した「本校卒業者」、またはそれと同等以上の学力のあるものを考査のうえ入学させる支那貿易講習科が、本科三年のそのうえにできた。校誌はこの新学科の設置を、「真に有意義なる措置」と高らかに自讃する。それというのも、「同種の大学専門学校中に於て正に一新機軸を開きたるもの」といえるからなのだ。日露戦後に高等学校から高等商業学校へとその校制をかえ、ついで東亜経営を使命として掲げ、そして「日支新協約の締結」（二十一か条要求。一九一五年六月批准）後という時勢のもとでの新学科設置だった。山口高商はその始まりにおいても、また「支那」という地域を特化しての学科制度の新設計においても、「戦後」という時宜が介在したのである（YH715–720）。その後この科は、支那貿易科と改称された（一九一八年一〇月一六日）。修了にさいして生徒によって記された、「我々は社会的理想に導れつゝ勉強したくない。将来の実業家は少くとも米国と支那の事情が分つて居なければ嘘だ」という支那貿易科志望の動機には、山口高商の教育方針である実学重視に通じる志向があらわれていた（「思出多き支那貿易科一ケ年」H2–4: 210420）。

支那貿易科でも、その設置目的からして当初から「生徒を支那方面へ旅行せしむることゝし、各自題目を定めて、その調査研究に当らしめ」ていた。支那貿易科生には、旅行補助費として、一人五〇円から三五〇円という高額が支給された。一九一九年には、前記のとおり実業界からの寄附金が旅費に活用された。しかし、一九二三年度以降の補助費の打ち切り、かつ不況による実業界からの寄附とりやめとなると、一九二三年度と翌年度には、わずか一人ずつの「私費旅行」があるにとどまった。一九二五年には前々年の対支文化事業特別会計法公布にもとづく、生徒一人当たり二〇〇円の補助金一〇人分が補給されることとなり、「漸く旧時の盛況に復することゝなつた」といいうる情況を得た。ときにこうした補助に支えられた支那貿易科では、一九一六年から一九二五年までのあいだ毎年、一名から一〇名の生徒を朝鮮半島から中国大陸、台湾に派遣していた。実業界から寄附のあった一九一九年の夏季休業中に六名の生徒が、「北部支那地方」「朝鮮、満洲各地」「北部及中部支那」「台湾、南部支那」へ経済事情の調査にでかけ、また外務省からの一人二〇〇円ずつの補助金を得た一九二五年には、「朝鮮・満洲・北支方面」と「中支方面」

への二方向への旅行がおこなわれ、前者では、「北支那の金融状態」「北支那及満洲に於ける苦力の研究」「近来勃興せる北支那各種工場の現状」「満洲の通貨」「北支那及満洲に於ける企業、主としてセメント及ビール」「北支那及満洲に於ける綿糸に就て」「満洲に於けるギルド研究」が考究され、後者では、「支那に於ける商業組織」「支那に於ける貿易と風俗」「支那に於ける各国貿易の消長」についての調査研究がおこなわれた(いずれも内容不明。YH795-797)。

山口高商の校誌は、一九二六年以降とするその第三期の記述を「支那科及貿易別科設置」から始めている。「我が国民の大陸に対する経営の任を遽に加重するに至つた」と校誌がみなした「満洲事変」のその後の「時勢の要求」と、高商への「改称以来東亜の経営を重大使命」としてきたとまたも記された「本校の使命とに鑑み」、「将来支那満蒙方面ニ於テ活動セントスル者ノ為メ」に「支那語」を重視した「支那科」設置を計画していたところ(一九三三年度入学生募集要項)、さらに「支那事変の起るありて、大陸長期建設の時期を迎え、興亜の偉業達成の為には、現地に活躍すべき多数の商業戦士を養成するの必要が益ゝ痛感せらるゝに至」り、ついに一九三九年に本科第二部として支那科が開設された(YH899-903)。山口高商ではここでも、戦争を契機にあらためて自校の使命が再確認されて、あたらしい学科課程の設置となったのだった。このとき支那貿易科は東亜経済研究科と改称された。[11]「東亜」を掲げた名称に変更されたあとでも、その科の生徒による修学旅行のおもな渡航先予定は、釜山、京城、奉天、撫順、哈爾濱、新京、周水子、旅順、大連といった「鮮満」だった(「見学旅行予定」H20-7: 390710、「学生旅行」H21-7: 400710)。貿易別科はそれにさきだつ一九二九年に、修業年限一年、希望者には第二学期に「馬来語」を課す学科課程として設置された。一九三四年には、入学時に「支那語又は馬来語」の選択をすることとなり、また、「実際的教育の趣旨徹底の為」にカリキュラムをかえた(YH903-909)。

戦争が高等商業学校の学科課程をかえたと自覚される一方で、「支那事変の進展に伴ひ、昭和十四年度に至つて満支方面団体旅行は、これを差控ふべき様、本省よりの通牒に従ひ、一時中止」となった。一九二五年以来、外務省から支給された補助金によって外地で調査研究をおこなっていた支那貿易科だけは、とくに許可を得て一九三九年にもその七月一七日から八月二日まで、教官一名、生徒五名で、京城、奉天、哈爾濱、新京、大連へ「満洲の石炭」「油房工業」「満洲の農民」「移民問題」の調査研究にいった。一九二六年から一九三九年まで毎年七月から八月にかけての数週間にわたっておこなわれた支那貿易科の旅行

も、さすがに一九三七年の夏だけはそれを実施することができず、翌一九三八年に渡航をくりこして、その二月から三月に大連、新京、吉林、哈爾濱、奉天、平壌、京城にむかった（YH1010-1015）。「戦後」が山口高商の教育機関としての展開をうながし、しかし、戦争が山口高商の一つの科目である修学旅行を停止させたのだった。

山口高商のいわゆる卒業アルバムは現在、山口大学経済学部東亜経済研究所に、本科三五冊、別科二冊、鳳陽会二冊、支那貿易科一冊が残っている。本科については第一回生（一九〇八年卒業）から第三五回生（一九四二年卒業）までがあり、たとえば第一回生卒業アルバムの表紙に「MEMORIAL ALBUM 1908」とあるように、生徒の卒業年度ではなく、卒業年がそこには記されている。このなかで海外修学旅行の写真が掲載されているアルバムは、第六回生（一九一三年卒業）、第一一回生（一九一八年卒業）、第一二回生（一九一九年卒業）、第一三回生（一九二〇年卒業）、第一四回生（一九二一年卒業）、第一八回生（一九二五年卒業）、第一九回生（一九二六年卒業）、第二〇回生（一九二七年卒業）、第二一回生（一九二八年卒業）、第二三回生（一九三〇年卒業）の一〇例となる。

生徒にとって在学をめぐる記念（メモリアル）となる卒業アルバムに、海外修学旅行の記録はどのように載っているのだろうか。一九一二年（第六回生）の海外修学旅行については、さきにみた南京孝陵での集合写真がたった一枚だけある。一九一七年の「満洲及ビ朝鮮修学旅行記念撮影」（第一一回生）というキャプションのついた集合写真は二隊に分かれたそれぞれが一枚ずつ（前者は奉天の北陵）、一九一八年（第一二回生）の「満鮮隊」と「中支隊」のそれぞれ一枚ずつ（前者は旅順か）、一九一九年の「修学旅行ノ南清隊ト満州隊」（第一三回生）の写真は、一枚は南京孝陵、一枚は爾霊山（後掲）、四つの旅行隊派遣となった一九二〇年（第一四回生）の「上海方面旅行隊」、「満鮮旅行隊」（奉天北陵）、「台湾旅行隊」（船上）、「北支那旅行隊」（北京）各隊一枚ずつ、一九二四年（第一八回生）の旅行は「旅のスケッチ」のキャプションがある八枚（北京、万里の長城、鴨緑江の鉄橋、爾霊山など）、一九二五年（第一九回生）の旅行もおなじキャプションで五枚（撫順など）、一九二六年（第二〇回生）は「満鮮支旅行スケッチ」の題で北京城内と万寿山、遼河、万里の長城（下半分切り取り）、一九二七年（第二一回生）は「鮮満旅行スケッチ」のなかに北京など三枚、一九二九年が「支那旅行」の題で北京や万里の長城など六枚（第二三回生）となる。

在校時の大切な思い出（メモリアル）となるはずの修学旅行写真は、第一八回生の旅行から集合写真が減り始め、第一九回生からはまったくなくなってしまう。重要な行事のはずなのだが、どこかちぐはぐな記録の仕方にみえる。

四　修学旅行という経験

㈠　〈実〉の体験

山口高商では規模でいえば、最少の一名から多いときで八〇名くらいの生徒が、朝鮮半島、「満洲」、「支那」本土では揚子江を遡航して漢口にまで研究や修学の旅行をおこなっていた。彼らにとってそれは、どのような経験となったのだろうか。

山口高商の学内外への活動広報誌といってよい『学友会誌』には、修学旅行について生徒からの厳しい意見がよせられている（「五月十一日より六月七日迄」G47:120715）。修学旅行はそれに費やした時間と金員にみあう評価制度になっていない、それは「修学旅行を見ること頗る軽きのみならず、且つ之が為に喰ひ込まれた科目の尊厳をも犯すもの」だとの難詰である。投稿者は修学旅行について説く――「高等商業学校の海外への修学旅行といへば、教場で習つた事の実際上の運行を察し、学んだ外国語を実地に使つて見たり、支那に於ける列国競争の状況を観たり、各国人の商業上に於ける優勝劣敗の原因を探り、更に進んでは其間に処する日本人は如何なる心懸けと方法とを以てしたならば、更に其の勢力を発展せしむることを得べきかなどゝいふことを実際に目撃した上で知り、且つ悟らしむることを務むべきものではないか」との指摘は、くりかえされる〈実〉の語の使用にあらわれているとおり、学校が掲げた教育方針を生徒がわがものとしたことの表出なのだ。

学校の方針に忠実なこの生徒は、「其智其舌を実地に活用して、出来る丈広く且深く観察すべきである。而して其の観察は自己の見地から自己に関係を付けて為すべきである。漫然観察したとて活きた観察にはならぬ。唯ゝ物識的骨董的観察となつて了ふ。其は活世界に乗り出さんとする者の取るべき道ではない」と、修学旅行を介してあらためて、実学重視という校是を「活世界」での処世技術へととらえかえしてみせたのである。あるいは、修学旅行先での同窓会京城支部による歓迎会でかわされた、「原理だけしつかり勉強して置いて、実際の方の疑問はかういふ旅行の際にいくらでも実地に就き先輩に就いて解決すればいゝぢやないか」との会話からも（「満鮮修学旅行日誌」G57:170714）、教室だけではなくむしろ修学旅行こそが実学履修の一つの場となっていたと推察できるだろう[12]。

では、山口高商生は修学旅行でなにをみたか、どのような「活きた観察」をしたのだろうか。ここでは二つの論点を提示しよう。一つは〈戦跡〉、二つめが〈大陸〉である。

(二) 戦跡

高商の海外修学旅行では多くのばあい、戦跡見学がその旅程に入っていた。山口高商生一行も、「豊公征韓の際、本陣の置かれし所」(京城)、「豊公征韓戦史にて知れる練光亭」「日清戦争の時に最も苦戦したりし船橋里の古戦場」(平壌)、「日露の戦跡たる諸砲台」(旅順)をみている(「満鮮二十六日記」G42: 110718)。旅順では、白玉山で「戦死者の社に詣で二百十八尺の紀念塔をも見ぬ、これ当地第一の眺望良き所にして、黄金老虎尾等の砲台、依然として前に立ち、後には陸軍の諸砲台ありて、尚今に籠城当時を思出さしむ」と現場に立って遺物を目のあたりにすることで、みたはずのない「籠城当時」のようすが思い描かれる。ついで武器陳列場へいき、「丁寧に砲台の模型に就て攻撃せし時の方法を説明され」、これを「一見百聞に如かずとも申す可き」「実物教育」とよぶ。また東鶏冠山砲台では、「堡塁は実に堅牢にして良くもかゝる所が落ちしかと疑はるゝ程なり、弾痕の明に今に残れる当時を思へば、見るに耐へざる感もありき、次で龍山に至れば前同様砲台前、今に人の骨の残れる位、実に総て皆人の血と人の骨とにて取りしと云ふも可ならん」との感想をもつこととなる。生々しさということであれば、爾霊山では、「案内人が流れる様な弁舌で当時の激戦を説明する。十年後の今日猶ほ雨の降る日抔は、岩の間から脂の様な物が滲み出るといふ、土中にまだ戦死者の屍が残つてゐるのだ」(前掲「満鮮修学旅行日誌」)と想像する機会も得られる。

先人の血の犠牲によって獲得した戦利という感慨は、蘇州での荒れた居留地をみたものにおいては、「是れが日清戦争の大なる犠牲を払ふて支那より獲得した権利の姿である。聞けば杭州の帝国租界もかくとやら。万骨を荒野に枯らして公爵の栄誉を贏ち得た御仁にはこれでも可からうが、愛児を失ふた国民は如何するのだ」との憤慨にかわる(「南支那旅行記」G52: 140715)。戦場の跡、戦利のその後という〈戦跡〉を目のまえにしたときの気分は、さきのよ

うな昂揚もあれば、また他方でつぎような淡白な観察の表白もある。旅順に着いて「一番先に目についたのは例の表忠塔である、その外、方角が一切わからない」と見学の意気込みもどこかあやふやななかで、二〇三高地から「山を下つて旧市街をぬけて戦利品陳列所へ行き東鶏冠山北砲台へ行く、昔はつまらぬ戦をしたものだ、飛行機のある今日こんなベトン台や砲台を作つて阿呆らしい、又港を見ても軍港として一文の値もない様に思ふ」と呆気にとられたようすをみせるものもいた（「奉天まで」G55: 160715）。

高商生が実地に赴き実学や実業の研究や修学をおこなおうとするとき、「戦後」の情勢が学校運営に作用した山口高商では、なおのこと〈戦跡〉がその視界に入ることとなる。〈実〉をめぐる一つのフィールドとしての〈戦跡〉は、その場に立った高商生の一人ひとりに、戦争を突き放してみるか、戦争をとおして国家を構成する国民の一人であることを自覚するか[13]、あるいは帰校後に記録にも書き残さないという無視をするのか、といった大きな幅のなかに点在する選択肢のなかのどれをとるのかと応答をせまることとなる。

㈢　大陸

一九一一年五月一二日に山口を出発して「満鮮二十六日」の旅行を終えた生徒は、その記録のなかで最初の渡航地である釜山での朝を、「新日本の第一日」と表現した（前掲「満鮮二十六日記」）。翌一九一二年には、同窓会京城支部から、「韓国といふ字を見る事の出来なくなつて以来、気候迄が何となく日本化せられた様に、此の冬は殊に暖かい、朝鮮といふ国に居る心地はなく支部員一同大元気で活動して居る」との通信があった（「京城支部通信」G45: 120305）。一九一〇年の韓国併合という国事が、人びとの心性の表現をかえた事例として、これらの記録は読める。国境の内となってしまうとなおのこと、日本から朝鮮へいったときには、「朝鮮に一度杖を曳くものは、誰しも国の権威と云ふものゝ偉大なる事に感ずるであらう。〔中略〕内地に許りゐる者には、国家の威光の有り難さなどは痛切に感じ得まい、之が殖民地旅行の一の賜だ」（「朝鮮旅行雑感」G50: 130720）と、〈外〉へでたときには強烈に国家の威光への感謝を痛感するというのだ。旅行という移動が国境を明確にするとき、鴨緑江をわたってこそ「始めて外国、即ち安東県の桟橋に上陸」したと実感するのである（前掲「満鮮二十六日記」）。

全学年が九州への修学旅行にでかけた一九〇六年に、このとき最上級生だった第二学年の「支那通」を気取る生徒が、長崎からさらにさきへの渡航先として選んだ場所が、「支那にて貿易上最も重要なるは揚子江沿岸、即中清地方」だった（「中清紀行（一）」G34: 070430）。「昨年の夏頃

は満韓熱大流行」だったというその刺激を彼は受けたようだが、しかし「幾分満韓熱の為め一時閑却されても、所謂支那の中原は主として此地方」だから、と中清地方にむかった。二日間の航海を経て、「暫くにして向ふに暗灰色の細く長き陸地が一線となつて、髣髴として横はつて居る。支那大陸を初めて見て、雀躍するを禁じ得なかつた」と興奮したことを記している。おなじように、「船既に揚子江に入れりと聞く、されど両岸杳として一物を弁せず、僅に黄波の蒼穹に接するを目撃するのみ〔中略〕大陸の一端に足跡を印するの日と思へば、徹宵交睫安かならず」と大陸上陸への期待が醸成する昂揚感を生き活きと記す紀行文がある（「中華民国旅行記」G47: 120715）。大洋からの眺めだけでなく、「長江遡江」の旅人も、「濁流混々、森々漠々たる長江に、始めて大陸気分を味ふた。見渡す限り果てしなき平原、紫にかすむ蜒々たる山丘、緑色の農村。別に景趣の雅なるなく、風景の妙なるなし。たゞ渺々、たゞ漠々、謂はば単調の一語に尽きる。さはれそこに名状し難き雄大の気分がある。〔中略〕その大陸的茫漠土は、我々日本人には実以て、立派な心の良薬である」との感慨をこころにとどめた（「遊支日記」G61: 190715）。上海に上陸しようとする旅行生が残した、「やがて雲烟模糊の裏に青一髪の陸地が見えて来た。おゝあれが亜細亜大陸か、陸地は次第に拡大して一髪の青は一条の藍となり一条の藍は遂に幾許もあらずして、茫莫たる万里の緑野と化して来た」と大陸を描出した旅行記もある（前掲「南支那旅行記」）。大陸への興奮というべき記述である。そこは、「支那大陸」とも「東亜大陸」「亜細亜大陸」ともよばれた大地である。

奉天郊外での気分が「満洲に来て予想外に痛快であつたのは、この馬車旅行である。一望千里と云つたやうな広漠たる平原の只中を、戛々と蹄の音を響かせて、ひた走る愉快さ！」（「満鮮修学旅行日誌」G57: 170714）と書かれたように、「満洲」の広大な平原に大陸を感得したとは、「満洲」旅行記によくみられる記述だ。大洋から遠望した陸地、海のような長江、「満洲」の平原だけでなく、青島の夕べに、「丁度赤土の広い野原の地平線に太陽が沈む頃であつた。〔中略〕もつと大陸的でもつと大きくて美しい、到底内地では見られぬ光景である」（「支那旅行記」G54: 151225）と感嘆した生徒もいた。上海での山口高商生は、足下に大地を踏みながら、「支那だ支那だ大陸だ、赤露のモスコーとも仏蘭西の巴里とも続いて居る大陸だと心に叫んだ」（「大陸の味象」G63: 201208）のだった。大陸への興奮は、「支那」の複数の地点から「亜細亜」の遥かむこうにあるパリをも想像させる威力をもっていた。旅行生は、大洋や大河の船上、平原の馬車内の一地点から大陸を鳥瞰した気分を得たのである。

さきに「支那大陸」をみて雀躍した生徒はまた、河ではなく海だと感じた長江を遡航する船上で、「此の雄大なる風光に接して誰れかは勃々たる雄心を起さざるものあるべき、余が島国的胆ッ玉は急に膨張して、我が活動舞台の大なるを狂喜」したと、活動場所の雄大さが自己の勇気や精神を膨張させたとの証言を残した（前掲「中清紀行（一）」）。大陸をみた目を日本に転じると、「日本のこせこせしてゝ箱庭見たいなのに驚く」（前掲「満鮮修学旅行日誌」）との発言を誘発したり、奉天から朝鮮半島を経て帰校した生徒が「日本は矢張小さいと思つた」（前掲「奉天まで」）りすることとなる。大陸への興奮は、ひるがえって、日本の矮小さをあらわにしてしまうのである。

他方で高商生は、大陸を目前としたところで、「起き出て見れば既に海水色変ず。さすがにとか、なんとか書きたきところ？」（「南支那旅行日誌」G50: 130720）と壮大になろうとする気宇を茶化した記録も残している。あるいは、「単調なる大陸の色に厭き」（「支那の旅!!」G76: 220710）、「満洲の大平原も見慣れたら何でもなくなつた」（前掲「満鮮修学旅行日誌」）と恬淡としたようすもみせる。大陸への興奮とは、みえるはずのないパリやモスクワ、茫漠としてなにもみえない海のような長江や、地平線しかみえない広原をとおしてこしらえられた想像の感情でもあった。「島国的胆ッ玉は急に膨張し」たと書かれた前掲の「中清紀行（一）」には、「最早支那旅行に厭気か出て、大陸的風光も飽いてしまい、日本の山水か恋しくてたまらぬ様になつたから帰途に就くことゝした」とも記されている。大陸への興奮が冷めたところに、恋すべき相手として「我か国の山水」が入り込む。彼にとって「何時眺めても飽かぬのは大村湾の景色であつて。余に最大の慰安を与ふるは博多湾の眺望てある」。さきにみた釜山で「新日本の第一日」を過ごし、京城で秀吉の遺跡に韓国併合の根拠をみいだした生徒は、「実に二十六日間の外遊にさへ、我国の美しきは自分ながら深く脳裏に染みて実になつかしき感を抱きぬ／とつ国の人にほこらむ日の本の／このうるはしき島のながめを」と誇るべき日本の美をうたう（前掲「満鮮二十六日記」）。「大陸の景色は実に偉大である」が、山口に帰ってみれば「日本の山河も悪くはない」（前掲「南支那旅行記」）のだ。大陸の色の単調さに厭き、「黄塵の為に悩まされた自分の眼に、眼薬をさした様な快さを感ぜしめた母国の風光」が讃えられる（前掲「支那の旅!!」）。「茫漠たる大陸から、帰り来つたとき、我が眼を疑ふた僕は、果して鈍遅なのであらうか。「夢の国」と誰かが言ふた。げに、夢の絵にうつる美の国にあらずして、何であらう。新緑の山野、碧の海、もう是丈言へば沢山である。げに美しき故国の姿／我等の帰り来つたとき、農は麦収に忙しかつた」（前掲「遊支日記」）と、長江や平原で

味わった「大陸気分」も山口に帰ると薄まってしまい、日々の営みの場に、そして故国の姿に美しさが観取されている。

山口高商の校誌は、その「満韓経営」という使命も「満鮮支」への修学旅行も、戦争などの国事との関係を記すいわばナショナルな記述によって記載していた。旅行した生徒が記した文章の多くも校誌と同様の書き方となっていて、そこからたとえば「国家を実感」する場として修学旅行を議論することはたやすい。すでにみたとおり修学旅行記には、麗しの島、美の国、美しき故国との記述もみえる。想像された大陸をめぐる興奮が覚めて萎んでしまったあとの気分の空虚に、こうした日本の国土や故国の風光への賛美が膨張したのではないか。

そう多くの量が残ってはいない高商修学旅行の史料から、国土観や国の風光をめぐる感性をていねいにたどる作業がわたしたちの課題としてある。

〔付記〕本稿は、二〇〇五年度三菱財団研究助成を受けた研究主題「戦前期日本の高等商業学校における植民学とアジア認識」の研究成果の一部である。校正のさなかの二〇〇八年一月八日におこなった滋賀大学経済学部ワークショップ（Asian Studies Workshop 参）で本稿にかかわる報告をおこない、おなじく報告者だった高媛さんからいくつか教示を得た。高さん、ありがとう。

注

〈1〉『山口高等商業学校沿革史』山口高等商業学校、一九四〇年、六〇二―六〇三頁。以下同書からの引用は必要に応じて本文中に YH602-603 と略記する。

〈2〉以下、山口高商の規程などは各年度の『山口高等商業学校一覧』（山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵。以下同研究所所蔵資料にはYの記号をつける）による。

〈3〉「満韓旅行」『学友会報』山口高等商業学校学友会、第三五号、一九〇七年一二月一六日、「雑報」欄（Y。以下『学友会報』は G35: 071216 のように略記する）。地名は当時の表記をもちいた。

〈4〉高媛「『新天地』への旅行熱(下)――『観光楽土』に第一歩を」『観光文化』第一五一号、二〇〇二年一月。高の議論以前にもたとえば白幡洋三郎（『旅行ノススメ――昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社、一九九六年）による「日本人の旅行を考えるうえで、修学旅行は決して欠かすことのできないテーマ」であるという指摘があったが、ここでは修学旅行というテーマによる歴史の見方や書き方の更新は想定されていない。

〈5〉長崎高商については、『長崎高等商業学校三十年史』長崎高等商業学校、一九三五年、序言（長崎大学東南アジア研究所所蔵）。以下同書からの引用は NH69 と略記する。

〈6〉 長崎高商では満蒙研究会の機関誌『満蒙研究』の創刊にあたって『満洲国視察旅行報告書』（一九三三年二月一一日。奥付では「創刊号」。長崎大学東南アジア研究所所蔵）と題した臨時増刊号を発行した。このときの視察旅行は一九三二年七月九日（長崎出発）から七月二七日（哈爾濱発南下）までの期間に大連、旅順、鞍山、奉天、撫順、新京、吉林、哈爾濱をまわる旅程だった。このときの旅行団団員は教官二名、学生一〇名（本科第一学年から第三学年までの各学年生と貿易別科生）、旅行費決算表によると一人一〇三円四八銭の支出となった。

〈7〉 「緑丘学園三十五年史稿本」（小樽商科大学附属図書館所蔵）。この稿本は一九四三年から一九四五年にかけて執筆されたという（荻野富士夫「小樽高商における年史編纂の試み」『小樽商科大学史紀要』創刊号、二〇〇七年三月、一八頁）。

〈8〉 『豊州新報』一九一九年一月七日（『大分高商商業学校二十年史』大分高等商業学校、一九四二年、二頁、より重引。以下同書からの引用はOH2と略記する）。

〈9〉 「母校生徒旅行規定変更」『鳳陽学報』山口高等商業学校同窓会、第二巻第二号、一九二一年二月二八日、「雑報」欄（Y。以下『鳳陽学報』はHG2-2: 210228と略記する）。

〈10〉 「貿易科生の研究旅行」『鳳陽』山口高等商業学校同窓会、第二巻第七号、一九二一年七月一〇日、「雑報」欄（Y。以下『鳳陽』はH2-7: 210710と略記する）。

〈11〉 一九四〇年前後の学科課程新設は複数の高商に共通する。たとえば彦根高商では一九三九年に支那科設置となり、一九四一年に東亜科と改称された。大分高商では一九四〇年に東亜科がおかれた。また複数の高商で学内に「東亜」や「満蒙」の名称を掲げた研究会が設立されるなか、山口高商では一九一四年に大陸研究会、一九一六年に東亜経済研究会（翌一九一七年『東亜経済研究』創刊）、一九三三年に満洲事情研究会（一九三八年に満支事情研究会）がつくられた。

〈12〉 これにかかわる論点として、高商における「現場統括者の育成という教育方針と〔中略〕教員の学理的研究をいかに両立させるかという、高商に固有」の課題が指摘されている（松重充浩「戦前・戦中期高等商業学校のアジア調査――中国調査を中心に」『岩波講座「帝国」日本の学知』第六巻 地域研究としてのアジア、岩波書店、二〇〇六年、二四三頁）。

〈13〉 戦前の修学旅行の要素にあげられた修学旅行が「国家の実感」につながるという論点は前掲白幡『旅行ノススメ』を参照。